

バツクトウの呪文

多喜川賢一

彩虹工房 Web 文庫

わたしは残念ながら、魔法少女じゃないもの。

テレビでやっている魔法少女ならば、呪文ひとつ唱えるだけで、どんな難問でも簡単に解決しちゃうのにな。それもわずか三〇分たらずの間にね。

わたしの望む魔法、それはね。二ヶ月前に時間を戻しちゃうってこと。

そんな魔法があったら教えてよ。

呪文を知っていたら教えてよ。

でもありっこないのは知っている。

時間は一方向に流れているだけだもの。

昨日から今、今から明日にしか流れないんだ。タイムマシンだって、いつかは現実になるのかも知れないけれど今は単なるおとぎ話よ。

誰も昨日には戻れない。

だから、人生は意義あるものにしなくっちゃあねってのは大人の説教。子供はね、そのまんまの環境で育つしかないんだから。

分かっているのかな。すねたり怒ったり泣いたりもするけれど、子供は大人に抵抗するなんてのは基本的にできないんだから。

子供はね、親を選べないんだからね。

尊敬できる人は？ 両親です。

そんなことを平気で言える人ってアホちゃうか。と、あまり知らないはずの大阪弁になる。マジで、本気で考えているのかな。それとも充分な思考ができないんだろうかって思っちゃう。

わたしは思うんだよね。

親がハズレだったってのはなんか悲しい。

どんな親のもとに産まれてくるかなんて、まったくの偶然なんだから。そりゃ、宝くじだって、当選するよりもハズレの方が無茶苦茶多いってことくらいは知ってるけれどさ。

出かけるための着替えを終えて、こんな考え事をしていたら階下から声がした。

「帆乃香ちゃん。朝ご飯よっ」

「分かった。今降りてくよ」

トントンと、軽い足取りでわたしは階段を降りた。一階のリビングにはすでに朝ご飯のしたくができていた。これ、みんな幸二さんの手料理なんだ。

すでに弟の洋一はスプーンで、ご飯をガツガツとかつこんでいた。まだお箸がうまく使えないので、もっぱら先割れスプーンを用いている。保育園の上級組なんだから、お箸くらい使えなくてどうするのよ。幸二さんたら甘やかしてばかりいるんだから。

幸二さんとわたしたち姉弟、三人の食事だ。これはここ四日間続いている食事の風景。

麻美さん、つまりわたしたち姉弟のママなんだけれど、事務所から帰ってこない。区議会議員選挙が迫っているからだ。

麻美さんはもう二期、八年間区議会議員をしている。選挙が迫ると、寝る間もないくらい忙しいようだ。ここ数日、事務所に泊まり込む日々が続いている。だからわたしも弟も、あまり麻美さんと顔をあわせてはいない。

幸二さんは麻美さんより九歳年下だ。完全に麻美さんのしもべ——いいや奴隷みたいなものかも知れない。だから逆らうなんて、これっぽっちも考えていないだろうなあ。それに小学五年生のわたしと違って、一三歳しか歳がはなれていない。だからわたしが、幸二さんを兄貴だと言ったって少しも不思議じゃあない。

何しろ幸二さんは主夫をしていればいいんだから、洗濯好きで、掃除好きで、料理好きで、朝一番に新聞折込のチラシ広告に目をおし、スーパーの特売品値段チェックするのが楽しみな男性なんだ。それって変だと思わないのかなあ。

とにかく幸二さんは変わり者だ。でもわたしは決して嫌いじゃないのよ。変わってるけれど嫌いなタイプじゃない。じゃあ好きかって訊かれると、おおいに——？　しっかりとした疑問符がついちやうのだけれどね。

つまり、どっちでもいいんだ。気にしないようにしているんだ。それがわたしのとった戦術なのよ。ゴマをすったり媚びたりなんかしない。甘えたりもしないし嫌ったりもしない。だって幸二さんは麻美さんの恋人なんだし、いずれ新しいパパになるんだろうけれど、ふたりがどうなるかとわたしには、あんまり関係がないものね。

幸二さんが訊いた。

「美味しい？」

「ん、マズくはないよ」

「そう、でも美味しくはないんだね」

「ちょっとガツカリした顔の幸二さん。フォローはしておこうかな。」

「ママのよりはずっといいよ」

「そう、嬉しいな。もっともっと上手になるからね」

幸二さんは、女性みたいに喜んだ。この細かい性格は生まれつきなんだろうなあ。幸二さん以前は、パパの助手をしていた人だ。

パパはカメラマンだった。もっぱら、カタログやチラシなどの写真を撮るだけの、名前の知られていないカメラマンだった。パパはいなくなっただけで、パパのいた頃から、パパの弟子と言うよりは。居候のようにしてこの家に住み着いていた幸二さんだ。今は、麻美さんと随分仲良くなっているようだけど。

食事を終えたわたしは言った。

「ごちそうさま。出かけてくる」

「あら、友達んち」

「うん」

嘘が必要だと思った。これからわたしは少しばかり遠出をするの。幸二さんにも麻美さんにも内緒の、秘密の行動なんだからね。

駅まで徒歩五分。そこまで行く途中に宣伝カーが何台もおった。みんな区議会議員候補者の名前を連呼していた。駅前には候補者の麻美さんがいた。宣伝カーの上に仁王様のように立って演説していた。決まり文句の公約を必死に叫んでいる。まるつきりオウムみたいだね。他に言葉を知らないの？ ねえ、喉が痛くない？ 声がかんりかすれてるよ。麻美さんったら、わたしにはぜんぜん気が付かないみたい。娘にも気が付かないなんて少し薄情かな。でも今日はその方がいいんだけど。ま、お仕事なんだろうから頑張つてよ麻美さん。

普段電車なんて使わないから、磁気カードなんて持つてはいない。だから自動券売機、その子供料金用のボタンを押した。磁気記録されている裏が黒い切符を持って改札の人の列にくわわった。改札も自動だから、大人と子供っていったいどう見分けているんだろうな。多分、機械には無理だから人が見張っているのかな。そんなことを考えながら、すぐにホームに滑り込んできた地下鉄の電車に乗り込んだ。

何度か乗り換えながら、モグラ電車の出口を出ると目的の病院は目の前だった。すぐく大きな病院だ。ここにいていいのかな、——パパ。新聞やテレビでさんざん言っていたから、この場所だけは知っていたのよ。

日曜日だから、通院の患者さんは誰もいない。玄関は閉まっているしどこが入口なんだろうか。キョロキョロと見渡していたら、見舞い客らしい人が横にある小さな扉から入っ

ていくのが見えた。わたしもその人たちに続いた。

受付にガードマンの叔父さんがいたけれど、怪しまれることはなかった。きつと親子連れだと思ったんだらうな。総合案内板で目星をつけた。七階に心臓外科一般病棟があった。エレベーターに乗って、行く先階数のボタンを押した。

そこは広い病棟だった。

どこにいるんだらうか。中央から左は女性、右側が男性病棟だった。わたしが用があるのは男性病棟なんだ。

最初にのぞいたのは四人部屋だった。お年よりばかりだった。ここは違うな。

名前は知らない。三十代の男性としか、分かってはいないんだ。次の病室にもそれらしい人はいなかった。ふたり部屋の病室ものぞいてみた。ここにもいないみたいだ。いったい、どこに隠れているんだらうか。

廊下から個室をのぞきながら歩いていると、背後から声がした。

「お前さあ、何してんのや」

ふりかえると、わたしと同級生くらいの男の子がいた。色黒でとつてもたくましそうな子だ。でも、少しだけ太っているみたい。子供のくせにメタボは駄目だよ。

「何って、人を探してるのよ」

「何号室や、名前は」

「そんなの知らない」

「なんや、名も知らん人の見舞いに来たんか」

「お見舞いと違うわよ」

「じゃ、何しにきたんや。ここは入院病棟やで」

「知っているわよ、そんなことは。わたしの勝手よ。あなたこそ何よ、お見舞いの」

「アホかあ。見て分からんか。こないな格好しとるのに」

「う、うん。パジャマだね。じゃあ、あなたも入院をしてるの」

「そや」

と、威張ったようにその子は言った。

「威張ることではないでしょ。でも入院しているのなら知ってるかな。ね、この病棟で心臓手術した人ってどの部屋にいるのかな」

「ほんまアホやなあ。ここは心臓手術で有名な病院やぞ。この階の入院患者は全員心臓の手術をしとるわ」

「えっそうなの」

「そーや、アホう」

「アホアホ、言わないでよ」

「んーそうだな。えろう悪かったな」

「でも、あなたも入院してるってことは、そのー心臓を」

「ああ、手術したんやぞ。傷、見せたるかあ」

男の子はパジャマをはだけた。肌着は付けてはいなかった。少年の左胸にはさほど大きくはないが、胸の中央に盛り上がった傷痕があった。

「ほ、本当だ」

「心臓弁置換術ゆう手術をしたんや。難しくて舌をかみそうやろ。でも、もうじき退院なんや」

どんな手術かは分からない。だけど傷痕がかなり痛々しい。縫い目なのか、ホッチキスの痕みたいなものがはっきりと分かった。

「痛くなかったの」

「手術中は麻酔きいとるから、なんも分からへん。麻酔きれてメえさめてから、すんげえ痛かったけどな」

「ふうん、どんな痛さだったの」

「そんなん言えるかよ。たとえようがない。お前、はたかれた痛みとつねられた痛み、違いが言えるか。言えへんやろ」

「う、うん。そうだね」

わたしは何か言い負かされてる感じで、反発した。

「あのね、わたしお前って言われるの好きじゃないの。わたしは帆乃香って言うのよ。高村帆乃香」

「へえ、可愛い名やな。わいは哲也ゆうんや。山岡哲也、小学四年生や」

「なんだあ。わたしの方が上級生じゃないの。わたし、五年生よ」

「上級生でも、同級生や」

「何よ、変なことを言うのね」

「多分同い年やな。わい一年落第しとるからな」

「落第、そんなのいまどきあるの。君ってさ、頭悪いの」

「アホお、入院してたからに決まっているやんか。学校のセンスは進級させる言うてくれ
てんのに、うちのオカンは落第させたらええって、落第を選んだんや」

「どうして、そんなん」

「出席日数たらんから、お情けの進級はさせんのやて。一年遅れたら、成績トップでもと
らんとかっこ悪いから頑張るやろて。もう無茶苦茶なオカンのや」

「あなた——哲也君の家もややこしそうだね」

「お前——帆乃香んちもか」

「ん。ま、いろいろとね。親は選べないからあきらめているんだけれどさ」

「そやな。どの家の子も親には苦労しよるわ。ほんま」

「そやな」

わたしもなれない大阪弁をつかって笑った。なんか変な男の子だな。お笑いタレントみ
たいな面白い子。それに色も黒いし体もわりとがっしりしている。ちょっと太ってはいる

けれどさ。病気なんてとても思えないよ。

若い看護婦さんが廊下を通った。

「あら、可愛いお友達がお見舞いきてくれたの。彼女なのかなあ、哲っちゃんてモデルのね」

「当り前や。わい、人気者なんやでえ」

何言ってるんだろ。いい加減だな、調子よすぎるよ。わたしとはまるっきりの初対面なのに。

哲也君はわたしに訊いた。

「で、ほんまはなんの用事なんや、帆乃香」

わたしのこと呼び捨てだ。すっかり友達気分でいる、ほんと、とことん図々しい奴だな。

「あのね、この病院で心臓移植受けた男の人がいるでしょ。一週間前に一般病棟に移ったってニュースで言っていた人」

「ああ、聞いたことあるな。でも、誰やかは分からへん」

「三〇代の男の人」

「そやったな。そうになると、ここの入院患者で当てはまんのは数人やな。で、探してどうすんのや」

「……」

わたしは黙った。別段、会ったばかりの哲也君にわたしの決心、教えることなんてまっ

たかないもの。

「なんや、言われへんのか。変な奴やなあ。ま、いいから来いよ」

哲也君は、わたしを看護婦詰め所前に引っ張っていった。

詰め所前には先客がいた。ビニールの薬袋を小さな車輪のついた移動台にぶらさげて、点滴をしたままの男の人が看護婦さんと話をしていた。

詰め所の中には廊下ですれちがった看護婦さんをはじめ、数人の看護婦さんがいた。

「看護婦さあん、これわいのガールフレンドなんや。彼女やで。どや、かわいいやろ。この帆乃香ゆうねん」

「あら、ごちそうさま」

と、看護婦さんたちは笑った。

「で、みせびらかしに来たのかな」

「ちやう、ちやう。こいつな。この病院で心臓移植受けた男の人いるやろて、テレビでは騒いでたから知ってんのやて、見舞いにきてくれたついでに実物見たいんやて。そんなどの部屋におるん」

看護婦さんたちは、あらと顔を見合わせて困った顔をした。

若い看護婦さんが言った。

「あのね、それが誰なのかは秘密なのよ。プライバシーに関わることだからね」
「なんや、ケチくさっ」

哲也君はわたしのために交渉をしてくれている。どうして、わたしがその人を探しているかも訊きもしないで。随分なお人好しだ。

「ケチで言ってるんじゃないのよ」

「なんで、そんなもん秘密にせなあかんのや。悪いことしてるんとちゃうやろが。それなのに黙っとるなんてケチや、ものすご根性悪いでえ」

「あのね、心臓もらった人も誰がドナーなのか、誰の心臓をもらったかは知らないの。ほら、テレビだって心臓提供者の名前までは言っていないでしょ。心臓を提供してください。わたしたちの家族も、誰に移植されたかまでは知らされないものなのよ」

哲也君は引き下がらなかった。

「そんなん変や。命に関わる大事なものあげて、もらって、それで知らへんなんて、どういう考えなんや。そんなんまったく理解できへん」

「でもね、そういう決まりになっているの」

「看護婦さんは知っているんやろ」

「そりゃあ、仕事だしね」

「だったら、教えてえな」

「ダメ」

「ケチや、ケチや。ドケチや」

わたしは自分が原因なのに、この騒ぎをポカンとして見ていただけ。なんでこの子、わ

たしのためにこんなにムキになってくれるのだろう。

脇にいた点滴したままの男の患者さんが、哲也君の頭をなでた。

「こらこら、ボク。ここは病棟だぞ。大声はいかんなあ。彼女にカッコええとこ見せたいんか」

「そんなんとちゃう。関係ないおっさんは黙っててくれんか」

「それがなあ、関係ないことはないんだ」

「どんな関係やねん」

看護婦さんたちは、男の人に何か言いたげな顔をして見ている。

「僕が、その当人だからさ」

「えっ。ほな、おっさんが心臓移植受けた患者かいな」

「ああそうだよ。この僕になんの用事なのかな」

「だ、そうなんだって」

と、哲也君はわたしに向き直って言った。

この人なの。

この人——！

わたしは男の人の顔をジッと見た。見たというより睨んだみたいなものだ。

「お、おい。帆乃香、なんや、なんなんや。どうしたんや。すっげえ怖い顔してからに」
わたし、まだ無言だ。

「なんの用事かな。僕はお嬢さんとは初対面だけれど、いったい何が訊きたいのかな」
看護婦さんもわたしを見ていた。なんなんだろう、この子何しにきたんだろうかって、興味津々って顔だ。

「心臓、動いてますか」

「ああ、動いているよ。どっどっどと鼓動をしているよ」
言ってる。

わたし、それを言うために、それだけのために、ひとりでここまで来たんだもの。

「泥棒」

「え——？」

ポカンとしている。

わたしはもう一度、さっきよりずっと大きな声で言った。

「ドロボウツ」

「うーん、どういふことかなあ。僕が、泥棒なのかい」

わたしの声はさらに激しくなった。

「そうよっ」

「君の何を盗んだのかなあ。うーむ……」

しばらく、ほんの十秒ほどだったけれど誰も動かなかった。時間が止まったみたいに感じた。

「パパの――」

少し、声が詰まった。

「パパの、パパの心臓を返してよ。叔父さんの胸の中にあるのはパパの心臓なのよ！」

「君は――？」

「高村帆乃香、あなたの中で動いている心臓の提供者、高村英一の娘です」

えっと、その場に居合わせた全員がわたしを見た。

「そうか、僕のもらった心臓は君の――」

わたし、口をへの字に結んでいた。

どうしたんだろう。

泣きたいなんて思ってもいなかったのに、顔がくずれた。なんだか分からなくなって、

その場から逃げ出した。

初めての病棟、迷路みたいで方角が分からない。突き当たりは展望が見渡せるガラス窓だった。わたしはその窓によりかかった。むしように悔しくてくやしくて、涙が止まらなくなっていた。

追いかけて来た哲也君が、後ろに立った。

「おい」

「ほっといてよ」

「ほっとけんわい」

「あなたにわたしの悔しさ、辛さなんか、分からないわよ」

少し強い口調で哲也君は言った。

「そや。そんなもんはさっぱり分からん。でもお前がひどいやっちゃということは分かるで」

「どうしてよっ、なんで、なんでよっ」

わたし、哲也君に強く言い返した。

哲也君の口調も強まった。

「何言うた。あのおっさんに何言うた。胸に手えあてて、ようつく考えてみい」

「ひどいのはあの人よ。パパの心臓を盗んだんだもの」

「ドナーカード持ってたんやろ。心臓あげてもいいって所にマルしよったんやろ。でなきやあ、心臓を取り出すわけないやんか。それにな、あのおっちゃん、心臓もらわれへんかったら生きていけへんかったんやで」

「そんなの知らない。パパはドナーカードに記入なんかしなかったのよ」

「そんなアホな」

間の抜けた声の哲也君に対して、わたしは言葉を浴びせかけた。

「パパは、パパはね、字を書くのがめんどくさいっていつも苦手にしてたのよ。ママが勝手に書いて持たせてたのよ。よく憶えてるわ。議員しているママが区役所から持ってきたドナーカード。パパはなんや、こんなかなわんわいってた。パパはね、パパは心は心

臓にあるって言った」

「心が、胸にあるんやと？」

「そうよ。パパは感動したり泣きたくなったり、ぐっとこみあげてくるもんあるやろ。それが心やて言っていたのよ。だけどこいつは、頭よすぎる奴には分からんことやとも言うてた。頭は考える場所やけど心は感じる場所やからなって。そしたら、何馬鹿言うてるのとママは言ったのよ。心は脳にあるんだから、それが死んだら他はもういらぬ部品なんだから、人様の役にたつならいいんじゃないのって。それでママが記入してパパにドナーカードを持たせてたの」

「なんや、すごいママやな」

そう言った哲也君はママのことよりも、わたしの、早口でまくしたてる言葉に驚いていたみたいにも見えた。

「わたし、反対したのよ」

「反対、心臓提供にか」

「そうよ。わたし、脳死しててもパパは生きてるって言ったの。でも、子供の意見なんて無視していいって。当人が望んでいたことですからって、ママは強引にそう言ったのよ。すべての臓器提供するってことで、心臓、肝臓、腎臓、脾臓、小腸から眼球まで持っていかれたのよ。まだ、パパ生きていたのに麻酔もなしで胸切り裂かれて、お腹も切り裂かれて……」

「そうなんーか。でもいくらなんでも生きてはいないやろ、脳死だったんとちゃうか」
「わたしね、図書館とかで大人の読む難しい本や、ネットのサイトを読んで調べたの。そしたらひどい、脳死してる人は人工呼吸器をつけたまま、動いていた生きのいい心臓を取り出されるのよ。臓器の生きの良さのためには、麻酔なんかはしないのよ。脳のほとんどが死んでるから、体はほんの少しも動かないけれど。胸を切り開かれた脳死者って、夕ラタラとした脂汗を噴出するそうよ」

「脳死してるのに脂汗やと？ まさか。そんなことあるんか」

「嘘じゃないよ。絶対に。もちろん、全員の脳死した人がそうなのかどうかも知らないけれど。でもね、もしかして、痛みを感じているのかも知れないのよ。痛くて叫びたいのに、口はピクリとも動かない。流せるのは脂汗だけ。全臓器提供だとこれは生きながらの解体なのよ。パパはママにバラバラにされて殺されたの」

そう言ってわたしはわざと、作り笑いで笑ってやった。哲也君、少し引いたみたいだ。「すぐにも死ぬんだから、臓器摘出が多少早かろうが問題はないんだって。蘇生不可能となった時点、ポイント・オブ・ノーリターン。それが人の死なんだってね。ママはそう言っていたわ」

「お前、難しい言葉を知ってるのやなあ」

「パパ、動いていた心臓を取り出されたのよ」

「動いてるのにか、そりゃそうなのかもな。死んでしまった心臓では移植できへんものな」

「あのね、ママはパパが嫌いだったのよ。だから、すんなりと移植コーディネーターの説得に、脳死になったパパの全臓器摘出を承認したのよ」

「それはないとちゃうか、そこまで母親を憎んだらあかん」

「ママはパパを好きじゃなかったのよ。だから、喜んで提供しますって言ったのよ。わたしが反対していたのに聞き入れてくれなかった。だからわたしもね、ママには秘密でドナーカードを持ってるの」

わたしは臓器提供者意思表示カードをポケットから取り出して見せた。四個のハートに翼が生えて飛んでいる。その中央に天使の女の子が微笑んでいる黄色いカードだ。

「すげえもん持ってんだな」

「将来わたしが脳死になったら分かるよ。パパがもし痛み感じていたなら、どんなのかってね。これね、ママへの復讐なの。娘はママの考え方に賛成だって。わたしがドナーになったら、そのときにもママは喜ぶのかな」

「アホやなお前。頭ものすごくよさそうやけど、かんじんの所がアホや」

「アホやなんて思ってない。でも君がそう思いたければ思ってもいいよ」

わたしと哲也君の話を若い看護婦さんと、パパの心臓ドロボーが少しはなれて聞いていたみたい。

わたし、これ以上、ここにいる気はなかった。

「エレベーターどっち」

「あっちゃやけれど。案内したるわ」

「うん」

すれ違う時に、心臓ドロボーさんが声をかけてきた。

「あの、お嬢ちゃん」

無視しようかと思っただけで、少しだけ反省していたから返事をした。

「さっきはひどいことを言ってますみませんでした。でもあれは嘘じゃありません。わたしの本心です。これでスツとしました。さようなら」

何かドロボーさんが言いたげだったけれど、もうわたしはエレベーターに向かって歩いていった。

エレベーターが七階につくと、わたしと同じ学年くらいの生徒が七人ほどが、がやがやと降りてきた。わたしは入れ替わりにエレベーターに乗り込んだ。「先生」「おお、お前らか」なんて声が聞こえていた。ひよっとしたら、あの人は小学校の先生なのかしら。今は教え子たちなのかしら。もうわたしには関係なんてないのだけれど。

「なあ、お前」

「ん。なんで哲也君まで乗るのよ」

「一階の売店にいくんや。何もお前を送るんとちゃうで」

「そう」

エレベーターの中はふたりっきりだった。

「お前さ、心が心臓にあると思ってるんか」

「分からない。でも心臓だけは特別な。他の臓器とは違う。パパはそう信じていたみたい」

「なら、帆乃香のパパはあの人や。あの人の中で新しい心になったんや。そう思えんか」

「――そんなの」

「どや」

「そんなの、思えないよ。絶対に思えっこないよ」

「強情やな」

「あれじゃ、パパ生きてるのか死んでるのか分からないよ。中途半端だよ。パパ、生きてもいないし、死にきれもしいない。そんなのわたしは絶対に嫌」

「そうか」

一階に付いた。

黙ってふたりはエレベーターを降りた。

わたしは一応哲也君にお礼を言った。

「ありがとう、いろいろと」

「ああ、しんきくそう考えるなよ」

わたしはそれ以上返事せず、病院を出ると走って地下鉄の入口にと向かった。

一週間後、麻美さんは無事に区議会議員に三度目の当選をした。麻美さんの戦いはひと段落して、麻美さんが自宅にいる時間もできた。

でも、麻美さんとの会話はあまりない。わたしはよくできた子供を演じているだけだ。わたしが自分をそのままに甘えられたのは、パパだけだったんだ。

麻美さんはよくお酒を飲む。パパが死んでからその量が多くなったようだ。相手している優しすぎる幸二さん、すっかり酔っ払いに絡まれている。

「わたし、冷たい女だと思われてるのじゃない。え、あなたもそう思ってんでしょ。いいのよいいのよ」

「そんなことはないよ。勇気ある決断だったと思うけれど」

「それ、本気で言ってるの」

「ああ」

「ならいいけれどさ」

麻美さんは棒読みで言いだした。

「頭部を強く損傷し、重度の脳挫傷に、急性硬膜下血腫を合併していた。深い昏睡状態、自発運動がなく刺激にも反応しない。自発呼吸の停止。両側瞳孔散大、対光反射、角膜反射の消失。急激な血圧下降とその持続。脳波活動の停止。これらの条件が六時間過ぎても持続している。つまり脳死であると聞かされたわけよ。もはや脳の回復は不可能でしょう。でも心電図は規則正しく動いていたわ。脳死がそういうものだとそこで初めて知っ

たの。でも、主張は変えてはいけないと思ったの」

麻美さんは、またオウムのように繰り返して自己弁護をしている。

酔っ払っているのによく憶えているね。よくそんなにつかえずに言えるよね。丸暗記をしているから、何度も何度も心の中で繰り返したのだろうな。幸二さんはそのオウムの録音、いつもこの聞き役だ。麻美さんは思ったよりは強くない。パパの脳死での臓器提供したことを苦にしているようだ。

それで酔っ払っては幸二さんに絡む。

みっともないよ。

最低だよ。

わたしは反対したんだからね。それを無視してまだ息をしてるパパを殺したんだから。苦しんで当り前なんだよ。

人殺しはもっともつと苦しめばいいんだよ。

嫌いだ。

ママなんか、ママなんか大嫌いなんだっ——！

わたし、あんな人の子供なんだ。

でも親は選べないんだ。これからもいい子は演じてあげるよ。たったひとりのママだもの。嫌いでも、ママをこれ以上酔っぱらいにはしたくないもの。

このごろのわたしは、自分の部屋にこもる日が多い。

机の上にあるパパの写真を見た。パパがセルフタイマーで撮った、わたしとパパが写っている写真だ。パパがわたしの肩に手を置いてくれている。もうこんな写真は撮れないんだ。

病院で、言いたいことを全部言っただけでスツとしたかと思っていたのに、悲しみなのか、寂しさなのか、そんなんで心はいっぱいになっている。

空がどんよりとしていた。

陽射しが弱まり雨にでもなりそうな空だ。降られては嫌だから少し走った。わたしが病院に行ってから、十日が過ぎていた。

「あら、お帰りなさい」

「ただいま」

小学校から帰ってみると、庭にいた幸二さん、急いで洗濯物を取り込んでいた。するとママは留守なんだ。

「クッキーあるよ」

幸二さん、手焼きのクッキーを焼いてくれていた。男のくせにマメだね、ほんとに。ムシャムシャと食べている弟の横で、まだ暖かいクッキーをつまんだ。

「美味しいよ」

お世辞じゃなくて美味しいよ。

「なら作り方憶える。教えてあげる。ボーイフレンドにプレゼントしたら」

「いないもん、そんな男の子」

「ふうん、帆乃香ちゃん可愛いのにね。男子ども見る目ないんだ」

クッキーごちそうさまと、二階にあがった。

国語のテストが九八点だった。幸二さんには見せなかった。嫌いじゃないけどまだ幸二さんは新しいパパじゃないもの。麻美さんにもテストのこと、訊かれないかぎりは見せないつもりだ。いつもまあまあねと、決まり文句しか言わないんだから。

パパは違ったよ。たとえ六〇点でも、そうかそうかって頭をなせてくれた。点数が高い高い回してくれた。でももう重くてかなわなくなって言ってもいたけれど。

「帆乃香ちゃん、お風呂わいてるよ」

夕食前、宿題をしていたら、幸二さんが階下から声をかけてきた。

洋一がわたしとパパと一緒に入るって言った。でもパパいないから、幸二さんと三人で入るってねだった。三人なんて嫌よ。わたしは弟とはふたりで一緒にお風呂に入った。

「ほら、頭を洗ってんだからおとなしくしてよ」

「パパ、こんなにひどくしなかったよお」

シャンプーが目に入るって泣いた。うるさいな、もう。文句あるなら幸二さんに洗ってもらったら。わたしだって長めの髪を洗うんだからね、そんなにかまってられないよ。つい二ヶ月前まではパパと三人で入っていた。パパはもうそろそろ帆乃香はパパと入るのは、

卒業だなんて言っていたんだけど。わたしはパパと入るのが好きだった。

「おねえちゃん、せんすいっ」

洋一はお湯の中に潜った。

いつもふたりで潜りっこをしていた。ブクブクしていると、パパが心配そうにのぞきこんでいたよね。

弟にあわせて、わたしも潜った。

お湯の中で息を止めた。

苦しい。

でももう少し我慢しよう。パパ、帆乃香は弟なんかには負けないからね。

弟は我慢しきれずに顔をあげた。わたしも顔をあげた。いつもはそこにパパの顔があった。あったのに――。

わたし、もう一回潜水をした。

今度顔をあげればパパがいるような気がした。ぐっと息を我慢をした。これ以上はとも無理になるまで。

勢いよく顔をあげた。

パパはいない。どこにもいない。弟とわたしがいるだけの浴室には、湯気が余分にけむっているだけ。

パパの馬鹿っ。

バカバカ、馬鹿っ……！

□には出さないけれど、わたしの心の中はパパへの文句でいっぱいだった。浴槽のお湯の中、わたしの真ん前で弟がわたしの顔をのぞきこんでいた。

「おねえちゃん、すごくこわいかおしてる。そおんなに、苦しかったの？」

ガタガタとお風呂の窓が揺れていた。さっきから雨が降ってきていたし、強い風も出てきたようだった。

突然、窓の外が光った。

ガラガラドシーン……。

近くに落雷があったようだ。恐がった弟がわたしにしがみついてきた。

「こ、こわいよお」

わたしは恐がりの弟を抱きしめてあげた。本当ならわたしがパパにしがみつきたいんだから。

昨日の天気が嘘のように、空は晴れ渡っていた。でも、昨日には戻らない。お日様は毎日同じように東から昇るだけだ。

お日様が西から登って東に落ちる。

時間が戻ればいいのに。

わたしはありっこないのに、目覚まし時計の針を反対に回した。

ずっと、ずっと回した。

――戻れ、もどれ、時間よ戻れ。

バック・トゥ・スクエア・ワンの呪文を教えてよ。

でも同じことを繰り返すんじゃないよ。嫌だよ。

やり直すの。

ふりだしに戻って一からやり直すの。パパの心臓移植なんかさせない。ううん、まずパパを脳死になんかにさせない。事故になんかあわせたくないよ。

戻って――時間。

バック・トゥ・スクエア・ワン。

魔法が欲しいよ。

馬鹿みたい。

アホみたい。

アホやわたし。

戻りっこないのに。過去は変えられない。でも未来は作れるのよ。自分の手で――。そんな理屈は分かってるよ。でも駄目なんだ。

「ほのかっあ」

ああ、うるさいな。

「ほのかっ、ほのかっ」

こら、勝手にお姉ちゃんの部屋に入ってきて、呼び捨てにするんじゃないの。

「何よ、洋一。うるさいわね」

きつく言うと、弟は泣きだした。

お姉ちゃんがぶつたと幸二さんの所まで、転がるように駆けていった。ぶつてなんかいないのに嘘つきなんだから、そうしてかまってもらって、イイコイイコしてもらいたいでしょ。

「ほのか、いけないんだ。いたいよお」

あらあらと、幸二さんの声がしている。あれ、弟だけじゃない。玄関先でだれか男の子の声もするみたい。

「帆乃香ちゃん、すてきなお客さんよ」

と、幸二さんが言った。

誰だろう、連絡もしないで急にくる男子の友達なんて。

わたしは玄関に出てみた。

「よう」

「え、——哲也君」

「お前のことなーんか気になってな。で、来てみたら弟を泣かせてるってか」

「そんなん、弟、悪いもん」

「姉ちゃんは優しいほうがええで」

「よけいなお世話よ。でも、哲也君いつ退院したの」

「ああ、昨日や」

「そうなんだ。退院おめでとう。でも、安静にしていなくていいの？ もう出歩いてもいいの」

「わいは、そんなヤワじゃあないぞ」

「でも、どうしてここが分かったの」

「教えた憶えはないし、どうやって調べたんだろうか。」

「名前と学年分かってたら簡単や、帆乃香、お父さんの名前も言うてたしな。名前で電話番号調べて、同姓同名二人しかいてへんかった。それらしい住所の小学校に電話したった。二件目でバッチシ大当たりや。そこで帆乃香正確な住所を訊いたんや。なんのことない。わい、大阪から引越してきて去年から隣町に住んでるんや」

「そうなんだ。でも、なんか探偵みたいね」

「そ。わい、名探偵や。アニメの探偵よりもすごいんだぞ」

「しよってるね。でも、来てくれて嬉しいよ。だけど、どうして電話をくれなかったの。番号が分かっているなら、その方が手っ取り早いし」

「あかんあかん。そんなんじゃ、感動の再会はあらへん。突然に行って驚かしたかったしな。どや、驚いたか」

「そりゃあ」

と、わたしは首を縦にふった。

幸二さんが、哲也君にあがるようにすすめた。

哲也君はこの人ってお兄ちゃんなのかと訊いたけれど、ううん、この人はいずれ新しいパパになる人もよ。という意味のことをわたしは言った。よくは知らないけれど日本の法律では、女性が再婚するには離縁や死別してから一定期間が必要らしい。でも一緒に暮らすのまでは法律ではしられない。だから幸二さんは主夫としてこの家にいる。

居間だと幸二さんに話が筒抜けになる。なんか嫌だから、わたしの部屋に哲也君を案内した。

別にちらかっているわけではないけれど、男の子を招き入れるのは少し恥ずかしい気もした。縫いぐるみとかぎょうさんあって、ピンク色がいっぱい、なんかホンワカする部屋やなあ。が、哲也君のわたしの部屋に対する感想だった。

哲也君は、机の上にあるフォトスタンドの写真を見て言った。

「この写真、お父さんか」

「うん」

「のほほんとして、ノンキそうな人やな」

「うん、そうだった。ママとは正反対の性格だったよ」

「そっか。どや、帆乃香。気持ちの整理はついたか」

「つかないわ。つくわけないもん。ずっと、中途半端のまんまだよ」

「そんなことやと思っとった。だったら整理がつかんというのが正直な気持ちなんやろ。そしたら、無理につけんでもええんとちゃんか」

「つけなくてもいい——？」

「そうや」

「それって宿題しなくて、ほっておくようなものじゃない。きちんと片付けて整理したいんだけどな」

「そんなことない。宿題、そのものが間違ってるのかも知れへん」

「そのものが間違ってる——」

「そうや」

意外な言葉だった。

「——そうなのかな」

「帆乃香は脳死からの臓器移植が、ええことなのか悪いことなのかよう分からへんのやろ。実はわいも分からへん。帆乃香に脳死の説明を聞いたら、死んでからの移植なら分かるけれど、脳死ってのはよう分からへんようになった。だから、分からんのもひとつの答えやと思うてる」

「気楽なのね、哲也君は。保留にしておいて平気なんて」

「気楽やないと、病気には付き合えへんで。でも、面白いやんか。父ちゃんが死んだのに臓器だけは生きのびてるなんてな。心臓にえっと……」

「肝臓、腎臓、脾臓、小腸に角膜、神経だったよ」

「ふうん、そんなにぎょうさん提供したんか。でもそれらが何人もの他人の体の中で生き続けとるんや。パパの死が何人もの生につながつとるんや。これって、ものすごい奇跡やと思うけれどな」

「奇跡やなんて思えない。これって悪い魔法だよ」

「そうか、ま、どう考えても自由やさかいにな。保留もひとつの答えやけど、自分のしっかりした考えを持つことは、とってでもいいことやるな。大事なことやと思うで。ただしその同じ考えで他人を測っちゃいけないんや。尺度つうんかな。それはものすごく大事ななんやけれど、そいつは自分だけにしか使えんもんなんや。わいはそう思うぞ」

そんなん分かってるよ。分かってるつもりよ。同じ年なのに説教なんかやめてよね。

哲也君はこうも言った。

「なあ、わいら子供は親は選べへん。それでも、親も自分の物差しだけで測ったらいかん。親かて子供は選べへんさかいな」

「親が子供選べないー」

とってても意外な言葉だった。

「そや。わいな、大人も大きな体してるだけで、子供とちっともかわらへんと思うとる。大人でも完全な人なんて滅多に、いや絶対におらへん。わいの親なんか高校もいっくらんし、きつい肉体労働しとるし、昔、父ちゃんも母ちゃんもツツパリだったんやと。頭、ム

チャクチャ悪いわ。もうかなわんわ。話にならへんくらい暴力的やしな。大人はわいら子供よりも少しだけ先に生まれただけや、だから対等に喧嘩をするけれど怨んだりはせえへん」

親だつて、子は選べない。わたしは考えたこともなかった。もしかして哲也君すごく頭がいいのかしら。落第生なのにな。

「親も子どもどっちも、お互い様——ってことかしら」

「そやそや、そういうことや」

わたしには衝撃的だけど気楽にはなれるよ。その言葉は。

幸二さんがジュースと、手作りのお菓子持って来てくれた。ママ以上に細かく気を使ってくれるんだ。そのジュースをふたりで飲もうとしたときに、哲也君の腕時計が鳴った。あ、いかん。こんな時間やと、哲也君はジュースでカプセルの薬と錠剤をゴクリと飲んだ。

「何、そのお薬」

「これは人工弁に血の固まりがでкинようにする、抗凝結剤つう薬なんや」

わたしは質問した。

「ふうん、そんな薬を飲んでるんだ。ね、哲也君は具体的に、どんな病気だったの」

「そやな。ええか、心臓には四つの弁があるんやけれど、そのうちのひとつがあかんかったんや。弁が完全に閉じずに血が逆流しとったんやと。手術してもこの薬はずっと飲み続けなあかんのやて。でも無理のない運動はできるんや。息切れもせんようになったしな。」

わいはまだいいんや。心臓移植受けた人はもつとしんどい薬、免疫抑制剤ちゅうもんをいっばい、一生飲まんとあかんのやで」

「じゃあ、あの人も」

「おっさんか。もちろん飲み続けるんや。一生、免疫との戦いや。なにせ、他人の臓器が入っているんやから、風邪の菌やウイルスていどの騒ぎやないやろな。人間の体は異物を攻撃するようになってきてるからな」

「じゃあ、あの人の中にあるパパの心臓も、あの人の免疫に攻撃されて苦しんでいるのかしら」

「そうやろな。でも、もう一心同体や。無理矢理にでも仲良うさせんといかんねん。それでないと、叔父さんも心臓もどっちも生きていかれへんさかいな」

パパの心臓も大変だけれど、そうか、あの人も大変なのだ。

「しんどいね、あのおっさんも」

「そうやな。それにあのおっさん小学校の先生らしいぞ。おっさん、見舞いにきた生徒たち、わいと同学年やった」

「ふうん、そうなんだ」

「おっさんも退院したで。わいより三日早くにな」

「そうなんだ」

「あの先生、すっかり帆乃香のことわいの彼女やと思うてた。そいでな、おっさん新しい

心臓を大切にするって言ってた。早く自分のハートにできたらいいのになって言うてた」
「それって、どういうこと。もう心臓移植されてるのに」

「心臓てな、移植されて動いていても一定のリズムでしか動かないんやと。普通は誰だっ
て立ったり座ったり、走ったり、感動したり怒ったり悲しんだりしたら、鼓動が変わるも
んやろ。でも、それが感じられないんやって言うてた」

「初めて聞いたよ、そんな話し」

「なんでも、移植成功でも神経まではつなげられないんやと。だから胸に入っているのは
機械の心臓か、エイリアンみたいに思えてくるって。でもあの日、帆乃香を見て、自分を
救ってくれたのはこの子の父親なんだって分かったら、なんかグツときたみたいなんやと。
鼓動が感じられたような気がしたって。一瞬、本物の自分の心臓のように感じたんやと」

「感じた――」

「そうや、感じたんやと」

「そうだよ。パパは、心は感じる所や。そう言っていたよね。パパ――」

「大切な心臓、ドロボーしてごめんなど伝えといてくれて言うてたで」

「――うん」

哲也君は帰ると言った。わたしは駅まで送るって言った。でも、哲也君自転車で来たん
だって。じゃ、その公園あたりまで送るよと部屋を出た。

もう外は夕方近かった。

「夕焼けやな」

「うん」

赤く染まった空の下、哲也君は自転車を押して、わたしはその左横に並んで歩いた。

「帆乃香、お前また会いたいか、あのおっさんに」

「分からないよ」

「お前の、パパのハートを持ってるんやぞ」

「うん、そうだね」

「あのな。もし、もしもやぞ。転校や転勤であの先生におうたら、帆乃香はどないする。

何言うんや今度は」

わたしは少し考えてから言った。

「あのね。パパの心が生きている間、心、貸しておいてあげるよ。そう言うつもり」

「そっか」

そう言って、哲也君は笑った。

わたしも少し笑った。

哲也君が訊いた。

「な、また来てもいいか」

「うん、いいよ。きつとだよ」

わたしは哲也君の腕を強くにぎった。強くにぎったので、哲也君は引いていた自転車を

倒しそうになった。

「あ、危ないやんか」

「ごめん」

「あ、あやまることやないで」

「うん」

彼は照れて、急いで腕を引いて立て直した自転車に乗った。

「また来るわ」

「うん」

自転車のペダルをこぎながら哲也君は後ろをむいて、手をふった。わたしも手をふりかえした。

すぐには家に帰る気にはなれずに、脇にある公園のブランコにすわった。

わたしは魔法少女じゃないもの。

過ぎ去った時間はもう戻せない。

でもそれでいいんだと、なぜか哲也君と会っていたら少しずつ思えてきそうなんだ。出会いは偶然だよ。偶然はまだまだいっぱい待っている。何も書き込まれていない白紙の未来があるんだもの。過去を変えてる暇なんかはないのよ。

自分で自分に大人の説教をしたるんや。決めたわ。もうわたしに呪文はいらないの。そんなものは求めたりしないよ。

わたしはポケットの中にあつたドナーカードを取り出だした。ママへの復讐で記入したドナーカード。一五歳になって、心が今よりも大人になって、それからゆっくりと考えるから記入し直そう。無理に急いで整理する必要はないんや。

哲也君の言うとおりや、そう思いながらブランコを少し揺らしてみた。赤い夕陽の中でオバケみたいに長い影が、わたしの動きにあわせてゆっくりと揺れていた。

〈了〉

バックトゥの呪文

<http://p.booklog.jp/book/43107>

著者：多喜川 賢一

彩虹工房

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/saikoubou0/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43107>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43107>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.